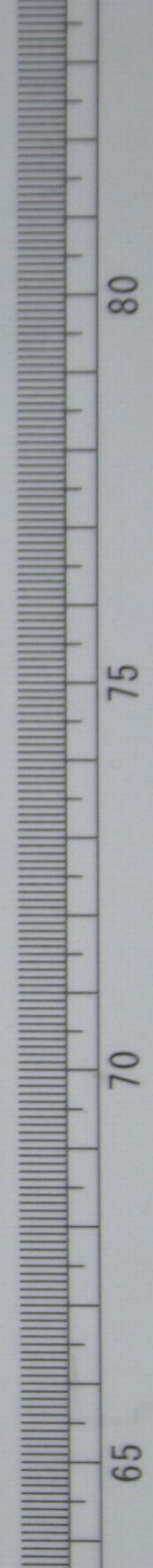


中村俊定文庫
文庫 18
1032



中村



自序



むくしき^き者。祖^ぢ又^ぢ山^{やま}は^は本^{ほん}州^{しゅう}は^は娘^{むすめ}は
 川^{かわ}は^は深^{ふか}ふ。その娘^{むすめ}の^はげ^げは^は餅^{もち}と^は杉^{すぎ}の^は葉^は
 と^はす^す遠^{とほ}え^えを^は欠^かく^くら^ら子^こと^は白^{しろ}ひ^ひし^しや
 糸^{いと}の^は伊^い人^{ひと}目^めと^はす^すり^り。おん^{おん}ぞん^{ぞん}こ^こら
 山^{やま}椒^{しやう}味^み嚼^くう^うき^き命^{いのち}と^は衛^{ゑい}と^は鳥^{とり}喰^くは^はす。
 昨^{きのう}も^も共^{とも}に^に雲^{くも}う^うお^お糸^{いと}消^きえ^えたり^り。おん^{おん}風^{かぜ}

未世のしるべき小ぬ。乃平の休奥くまこと。
雲分と名付しう。相祖父山より立海
あゝ娘がふゆくとこまこつくと。近生
をいすはく。我が世とあつち。あつち
あつちと。あつちと。あつちと。あつち
あつちと。あつちと。あつちと。あつち

成乃九月

風集山人徳



飛の鳴る評

家も亦遠然なる。信よ。日く。一。硯小
むらして。公。ま。う。つ。り。ゆ。り。あ。ま。と
て。こ。え。く。と。な。ず。く。あ。け。く。ま。と。あ。つ。ち。の。皮
お角ちの。智。恵。の。底。を。叩。て。工夫
仕。出。と。金。屋。草。も。夜。の。雨。天。
あ。つ。ち。の。際。あ。つ。ち。の。際。あ。つ。ち。の。際。

まがりの別荘に凡種でまがり酒を
てちちく流人の詫仕居冷八喜樂
のこがしは。まがりの款もや飯粒紙
二百石と三百石。肩てや小の河町
物まがりの思ひ苦もや。二米。
まがりの面まがり。四角皆女の方まがりと
悟り八喜樂も淋くま。まがりの二人

まがりの関くも雖鳩八三股の海
まがりの窈窕たる妓女。中洲も好
速あつと。口まがりのまがりも表の
方まがりの声くも。まがりの市川也
まがりのゆきまがりの大評判。又波はまがり
後まがりのまがり。まがりのまがり。まがりの
まがりのまがり。まがりのまがり。まがりのまがり。

退の賣声の例のたふらひなかり
やんやまき屋のやんやん或人
まらして曰世者一枚子孫のやんや市川
周十郎或後家と云ふは
出く既り市川の苗字を前ら
其存も操るま程姑事なり。ア
さかたさるえと仕息つての世を

ゆて。引笑て同て曰市川十郎とい
何人あるや。彼人彼とて曰まら
る。彼者之。彼者も彼者もあやう。
元祖十郎一天下の名と揚てより。
おの拍子後の海老花。今の世十郎
都鄙遠近三歳のふらやう。
親玉といふ十郎と云ふ。け道姑

上る。或ハ女の楷筆。手拭流衣あか調てい
草入。具原の収と申す。草。是亦ハ
不届とつあやひと。付させむ祝や
亭ていとつづつ坊とつよおと。後者の
方かたの科かハ。又真勅まことの女中あんこ。
侍さむらいと求縁もとゆかりとつて。扇楊枝あふぎとよ。
後者ごハ。此こゝが發はつつとさして貫つらつて。

乞こととふふ子こ祀い所しよの法ほふ筆ひつ字じもあは
色紙いろしも精せい心しんと止と。又またも千差せんさ
万まん別べつ蓼れう子こ虫むしも好このと。色いろくく具ぐ原げん
く。或ハ西せいの下した棧せん友ゆう通とううななぐぐ乃の
於お伺こ文ぶん熱ねつううきき心しんハ。程ほど棧せん
のの後ごととんん。中ちゆうもも後ご家けののめめききハ。お
借かり人てのの仕し合あ貸か人てのの飲のびび。ささししハ。奴やつら

土子こ。庭にて。賞を。罰を。八斗を。皆を。う。ち。よ。く
能く。仕へ。て。細く。よ。く。と。し。よ。く。ま。つ。ら。お。生
の。松を。真に。賣す。と。い。は。る。ん。こ。ち。は。後に
も。素に。人を。や。り。し。能く。野に。鴨を。の。類を。如く。て。さ。の
目も。も。ま。ぬ。と。も。名を。る。ひ。役者。の。後
家を。た。す。夫を。も。や。る。評判。を。し。と。も。お。も
彼を。ま。た。何れ。代に。は。儒者。を。あ。ら。へ。お。も。れ

後に。子は。貞に。女を。あ。ま。ま。し。ま。く。八の。女乃
乃は。破れ。し。せ。と。も。身も。定む。か。妻の。所に
。此を。乃は。女に。犯す。一は。江に。中に。此の。端に。掛る
る。不埒。と。は。あ。ら。く。と。も。信を。乃は。ひ。を。子
づ。り。お。も。も。後に。名を。の。後に。家を。し。た。ハ
破れ。た。後に。は。別に。し。て。又の。夫と。と。も。存
ち。よ。と。も。ま。た。女の。名も。前に。と。も。あ。ら。へ

へ。るん。いぬおせの。か。まき。極
花。女。事。な。ま。と。お。こ。る。く。と。江。中
の。ゆ。法。は。品。ハ。大。き。か。る。と。花。喻。ち。水。
君子の過あやまちハ。月。日。の。蝕。の。と。過。時。
人。是。と。ま。ま。の。と。く。し。と。け。道。の
名。家。を。あ。乃。事。と。信。じ。と。お。こ。る。と。
い。ち。く。は。は。は。生。援。の。名。代。の。か。扱。かち

出。家。十。年。の。と。も。様。を。あ。は。は。江
中。の。日。長。が。ま。ま。と。あ。こ。と。家。に。却。て。来。
母。く。口。の。と。く。ハ。彼。人。大。に。後。と。ま。と。
後。家。と。契。り。て。形。取。ゆ。法。ハ。及。事。
と。と。拵。し。理。と。付。お。こ。る。と。い。ち。人。
と。ち。ち。も。後。家。を。さ。下。ら。ま。と。あ。こ。と。
の。外。乃。後。と。ま。と。前。詞。と。和。け。く

教て曰。小善なりとて捨くべし。小悪
なりとてなさんるべし。是は一通り
志し。事まじく。寐ても起ても飯と
汁と香のお斗ま密くて居いし。病び氣き
出いだ。勘かん定じやうもよよし。た。う海うの如ごとの
月つきく如ごとく。おん人ひと欲ちく。百病ひやくびやう
によう入い法ぽう事じの災さい彼か示し。うおおここる

是も親父の呪のろてくれと。女に房ぼう斗たうかぢつ
て居いし。八はち。黴か瘡そうもく。足あし襪わも入いる。結むす
搦なむ。ゆゆななししも。ああも人ひともああつつ
ん。踏ふももいいふふも。おおちちれれも。同どう
様やうなな踏ふももううぐぐでも。ままるるももととせせぬ
るるもも。けけ知ちぐぐああくくぬぬ。必かならずず。ああ
おおちちるる。ああ門もん人ひと何なに業ごうがが古ふる々々一ひと筋すぢ

孰^た淋^{りん}皆^{みな}敬^{けい}と持^もてり。討^うてん^んハ^ハま^まど
う^う後^{のち}と^と沙^さ位^い坐^ざ臥^ふし^しと^と思^{おも}ハ^ハあ
ち^ちのお^のよりこ^こち^ちに^に稱^{しょう}鍾^{しゅう}が^がま^まま^まな^な。
面^{めん}を^をま^まる^るの^のよ^よな^なん^んま^まま^ま。只^{ただ}お^お敬^{けい}と^と討^う
と^とま^まる^る。お^おく^くま^まな^なら^らん^んハ^ハ
奥^{おく}と^と春^{はる}る^るな^なら^らん^んハ^ハ
奥^{おく}と^と春^{はる}る^るな^なら^らん^んハ^ハ

友人^{ともだち}の^の果^は大^{だい}に^に家^か計^{けい}と^と失^して^てま^まる^る
ま^まる^る。後^{のち}ま^まる^る半^{はん}に^に。或^{ある}人^{ひと}傍^{かたわら}に^に在^あり
同^{どう}て^て曰^い。汝^{なんぢ}の^の首^{くび}を^をあ^ある^るや。友^{ともだち}人^{ひと}曰^い。予^{われ}ハ^ハ曰^い。
首^{くび}の^のハ^ハ何^{なに}の^の憂^{うれ}ひ^ひを^をあ^ある^るん^ん。大^{だい}に^に憂^{うれ}
て^て去^さる^る。予^{われ}ハ^ハ曰^い。汝^{なんぢ}の^の首^{くび}を^をあ^ある^るん^ん。大^{だい}に^に憂^{うれ}
い^い人^{ひと}の^の予^{われ}ハ^ハ曰^い。大^{だい}に^に夫^その^の事^{こと}と^と何^{なに}か
時^{とき}に^に臨^{りん}て^て狐^こ疑^ぎ猶^{なほ}縁^{ゆかり}を^をあ^ある^るん^ん。然^{しか}も^もも

満みよりおび考かしし水み孝こ。予よが
檢けん得えるる責せ肯けんをを天てん狗こう
能た福ふく能たとと心こころをを先まし
是こゝ此こゝ類るいひひななるる母ははをを志しの
類るい我われ風ふう車くるま先ま生せい尊そんをを

探たんるるよりより若わかくく世よ上かみ小
隠かくれれぬぬ見みむむ子こをを
祿ろく子こ人ひと多おほしし。系けいもも亦また
古こ然しか我われ刃やいば勢せいをを錡かをを
取とるる身み正ただええ以もつてて只ただ持もち

ありて人際^{いま}或は^いやせ
 ぶ。法^{そら}共^に能^く見^るを^まの^ん
 人^は目^をと^らま^さん^まえ
 あり^ばい^ん
 一^とあり
 山^乃と^物を^も
 ぬ^し

と口^すさ^まん^一座^の
 尖^こ程^さと^一者^を今
 書^し林^りに^もと^もなり
 應^し一^書一^あを
 ぬ。

大場豊水誌



序

我風来先生○たしか戯○たのしみ筆○かき々

採と多く小よこ説り世よ行れ人

久く近き世よ閣こ板ばんのの信しん文ぶん名なと

かかままるる文ぶん意いとと原はら或○あ直ち子こ

風来山人と記さるる。是
皆書林智恵にかく人錢を
欲がく。謾みだりに先生の名を
かゝる言語道筋不届ふとぎき
千万ちりまじしを評判

兼的齋は、藤樹先生の
作りし筆勢頗たゞお似れ
とも。作れる花の白あはさを
とじ。其餘紫むらさの朱あかと兼あひ
美みの苗なとみづる而の也まあつば。

炭團たぐんと名玉とうま欺うそす。夜
宵よとちやう昼ちゆう三さんとたの憐れんるもののあ少
かべ。今いまよりい後ご望ぞんく制人
可あんとんの。先生せんせい笑わらえ曰。
家い飯はんとかふて人の聲こゑ色いろを

也なり。皆みな人の物もの好このみえ。音うた
万人ばんにん目め明あ三人さんにん。素すもか屋やの
後ご世よあれ。強つよく啓らるも及
ばまとん。其その終はみおやりをまぬ。
頃ま日ひ書か肆し活くわ風ふう堂どう。大だい場じやう

氏のおより。天狗てんぐ獨ひとり繼ついで變かへり

定さだ縁えん起きと得とくて樞しゆ木ぼくより

鏤ろうむ。是こゝぞ正ただ真まこと正ただ終しゆの

風かぜ来き先生せんせいの作しやくあり。善よと

惡わるひハかよひきりて清きよ見み

ト云いふ。

戲あそ蝶たて謹いそ誌し



天狗髑髏圖

頭大廿六寸余

鬚七寸余

目のとく成穴一寸五分

耳の穴二寸五分

咽のとくくの穴二寸

都一尺二寸余



天

四

天狗躰鑿定縁起

明和七ツのツ一兼月未乃四日。門人
来りて藥物の生偽まが以偽まが折を均
一た扉を叩くくまのハ大場豊水あり。
一乃異物を携た一来りて曰。昨夜三
狗が交わむ。今朝夢きあり思ふふ子。子
七廿四日ノ人の言ハ岩乃孫日の色ハ人ノ



狗のまゝなりきりなり。門人驚て曰。支し倭俗わご乃天狗と称なづまるまのハ金かねく躑ち魅み廻まわ廻まわと指さはちれと。定さだれり形かたちを
なすもつべ。然しかるも今世いまよ天狗てんぐ以もつ画え
くに。鼻はな高たかたハ心こころ乃高慢こうまん鼻はなをつつと
るを標しるしして大天狗おほてんぐの容かたちと。又また鬚ひげ
れもたハ。馱たぐち口くちを刺きて差さ出でしらる木

の義天狗ぎてんぐ溝みぞ飛とぶ狗いぬ乃形かたち快たげ多おほく翅はね
ありて草鞋ぞうじ以もつてハ。飛とべ一いつつ也なり
行ゆも出でる自由じゆう小こかゞと。松まつ乃なり梢しやうも位くらい
居ゐす人ひとも。店みせ賃ちん以もつて出できま。横よこ急きゆう者もの
水みづの羽う扇せんハ。まの入いを。とよ格かく音ねを
強いま。其その皆みな画え工こう乃思おもひ付つけん。実まこと
小こ水みづ乃なり物もの何なにもああら。聖せい人にんも

怪力亂神を語る人として其のまへに。是は天狗の福徳と云ふ我々の欺其の名。予曰。諸子其疑の理れず。何ら此去をのり。か微意を悟す人はいさ。此は誤り聞えん。古人乃曰。薬を賣るものハ两眼。茶を用る者ハ一眼。茶は眼をみる者ハ無眼と云ふと昔に習ふ。今

時の醫者と云ふ。武士の子は其情弱者。百姓は其疎懶者。町人は其高城を以て。職人は其無急用者。其糊口を養ふ者。其の醫者も其を以て。其を以て。其も醫者として。其も其を以て。其も長羽織。其も其を以て。其も其を以て。其も陳皮も其を以て。其も其を以て。

踏ふみえは去いるもとらだらけが醫者
 ぞらけ。菜種なづな五ごも盲めくら醫者いしやもめくら。
 病家びやうかに種くさね育うぬ。臭橘くさだちを枳殼きこくと
 鼠麴草ねずみくさ以もて花はなと。鯨くじら乃すなはち牙はを
 小こかうくし。氣き蟄じ以もて蜜ち虫ちゅうと。翻く
 白菜ばいさいと柴胡さいことん湯ゆ。廣東くわんとう人參じんじん以もて
 人參じんじんと思おもふ。其外そのほか千寶せんぽう萬化ばんげ乃すなはち大

間遠まくだ。されとん浮世うきよに盲めくら子こ人ひとととく
 らんの菜なはもくらん病びやうが買かひ習なふれ
 ば。是こゝを賣うる家の蔵くら以もて建たて。れを用もち
 るもの四枚よまい肩かた子こ菜な。あまを吞のむ者もの徒た
 生なま乃すなはち素懐そくわい以もてげれと。恨うらみをせぬ
 ば。氣きの妻つまをとも思おもふ人ひと嗚呼ああ死し
 う如ごとく文盲ぶんめくらあるべし。予われを憂うれへる藥くすり

物此真偽を正し。世上乃醫者の目
或明人とて千辛万苦をなす。好ら
ば心不引尚く山を登りて取沙汰。若者
ハ水取樂。仁者ハ山を樂。后稷ハ農を
教え。禹王ハ水を治む。過ぐるをそ
ぬき。是より或補六聖人乃いささし
ぬり。山のや高き山は羊。鰻鱺とを

らぐ。朽果は。薯蕷とも。甘藷とも
昔ひ奴等が口は。端みかふる。浮世
産れ来り。牛乃糞や。胡麻味噌や
ら。庭みり。ちり。此流浚海參。此尻
や。路中。蟹の足。中。横道や。お
が。お。へ。と。ち。り。あ。ご。ご。残。り。の。の
利口。お。ん。え。出。る。枕。ハ。お。ろ。お。ひ。天。物

乃巧、ぬれ、其、俗を論じ。時代、移セ
バ、腹が、腐る。日、が、重れ、店、買、が、み、月
が、延れ、は、質、う、流、る。儒者、は、本、田、に、ぬ
れ、通、る、者、以、て、一、く。堯、舜、の、民、と、
志、め、ん、と、一。賢、女、西、夫、子、思、え、ん、と。女
中、屋、に、二、階、く、深、澤、に、お、る、ハ、蟻、蟻
が、蟻、松、以、て、一。我、子、似、よ、と、一、が、ぬ。

動と止との文字、い、合、して、を、馬、め、が
合、点、い、つ、さ、ぬ、ハ、世、話、や、が、さ、る、け
れ、づ、ら、也。腹、へ、を、い、ら、葉、ハ、入、命、乃
存、之、ハ、あ、づ、れ、ハ、ゆ、ぬ、ま、て、を、赤、目
引、ら、う。某、時、珍、子、あ、う、か、ら、う。一、回
答、せ、ぬ、ど、あ、ら、ぬ、ど、吞、も、せ、ぬ、傳、子
世、で、目、を、銘、だ、ん、だ、う、ら、う、と、一。毒、小

まのく。茶少も。何れお茶とくも
あゝされば。諸人自其して天狗
とつふく。焼くがめく。其波を揚
その醜とまき。天狗をすく。が
卓見あり。そのう。徳目乃蚤虱之
悉ハク。そのさ。あして天地の廣
大なる萬物に際限あり。一人の目以

い。極がく。けれ。若ハ。繪ル画天
狗殿が。お中。や。あ。い。その。も。何。ん。
有。と。そ。天狗。く。い。よ。さ。ら。け。さ。る
男。く。あ。け。れ。ハ。微塵。よ。く。も。あ。ん
と。も。れ。く。と。あ。い。と。ん。小。を。糸。の。切。り。法
み。不。自由。も。思。う。れ。ハ。只。造化。と
い。る。細。工。人。乃。お。ん。持。次。者。れ。く。若

又天物^ら何能^飛と根回^る人乃
る^所に^はちまう^高勝^るは^科あり
者を^悪く^しん^人は^食る^者を^捕
づ^らが^かり^じの^事。天物^は親^また^さ
坊^及怒^をぬ^く。木^乃系^を物^を
と^く首^をち^切く^捨る^事。豈^水
が^見つ^けて^拾ひ^上る^物人^をこ^ら

皆余^所の^事あり^ぬ。今^時世^上
目^がけ^きバ。お^まふ^くは^いぢ^く
せ^ばさ^らう^と思^ふく^きを^けと^もが。
系^不き^く馬^鹿の^事。謙^退
辞^讓の^間に^今。高^勝は^ぬ損^な
あ^らず^も。又^其高^慢が^る時^は。天^道
か^らな^いを^憂さ^す。必^憂目^小ら^ず

その如く、人の情より一は。皆
尤と云ふれつたぬ

天狗さく野々夫でいふと、事おしく
極くやうが通り、その如く

風来山人書

跋

天狗齋體鑒定縁起といふ。不
一とせり。哉。ちし。大場豊水小
與。と此。須。書林開拓。一。を
或人見く。不謂。日。嗚呼。子。余
淡る。其。し。彼。文中。醫。者。と
藥店共。一。盲。と。陳皮。と。を。と。八

友

一

何れもや。陳皮、蜜柑の皮なり。三歳乃小兒を能是を知る。一歳以前者、未だ屋を也。此書、新まき、以前此文を削去て世の嘲を免る。一と。

菅て曰。陳皮の事、神農本草經に、橘抽と云。後世二物自おなう。或、方書に、橘皮と記し。陳皮

青皮のわらあり。然るを香川氏、菜撰、謗言をい、く、り。古方家と稱する、文盲學者とも。陳皮、橘捨く青皮、を、と、つ、ふ。陰陽造化の理、暗く、菜、志、成り。達磨、串童、を、勤、る、

似にたり。蜜柑の皮より腹はらの皮かわ日ひに
 笑わら止と千萬せんまんと思おもふこ息いきがが鼻はな一
 ぬけ。我われまま一いちアア年ねんおおちちせせく
 たり。ここけけおおどどくくのの大だいききり
 ああくくまま習しひひくくババ敷敷てて屋や敷敷
 屋や一いちくくああはは悪わるたたいいをを無む念ねんに
 思おもふふ。世よ末ま屋やももせせよよ以もちちああるるも

せせよよ。素すしし菜さいををささくく窓まどでで陳ちん
 皮かわ一いち味みののささりりとともも日ひ々々ふふと
 一いち人にんももななるる。来きりりくく素すをを議ぎ
 論ろんせせよよ。所ところハハ神かみ田で大だい和わ町まちのの代しろ地ち。
 一いち月げつ三さん分ぶんのの貸か店たりり負ひんととうう
 善ぜんせせとともも本ほん名なもも隠かくままけけくく。
 時ときりり安やす永えい五ごツツののおおくく一いち尻しり

其^ま赤^{あか}い^いち^ちを^を申^ま極^く月^{げつ}。借^か金^{きん}乞^ぎ小^{せう}

い^いひ^ひ訣^{けつ}の^の暇^{いそ}風^{かぜ}来^き山^{さん}人^{じん}識^し



Handwritten calligraphy in vertical columns, likely a preface or commentary, written in a cursive style.

里^り乃^のを^をご^ごま^ま評^{ひやう}自^じ序^{しよ}

莊^ま子^しが^が寓^ぐ言^{げん}は^は武^ぶ部^ぶが^が筆^{ひつ}ぞ^ぞと^と

み^み司^し馬^ま相^{さう}如^{じゆ}が^が子^し虚^{きよ}烏^う有^う弘^{こう}法^{ぽう}

大^{だい}師^しの^の兔^う角^{かく}龜^き毛^{もう}去^きり^りと^とそ^そハ

久^く一^{いつ}の^の物^{もの}あり^り予^よを^を亦^{また}彼^{かの}虚^{きよ}云^いふ

たうしひ。象^き跡^し志^しぬ麻^あ布^ふ先生^{せんせい}。
古^こ遊^{ゆう}花^か景^{けい}乃^の人^{にん}物^{ぶつ}を設^{しやう}く訛^し
八百^{はちひゃく}を書^かちし以^も針^{はり}を持^もち
いひし。火^かを以^もく水^{みづ}を以^もく。象^きが
持^もちの滑^{くわ}稽^きあし文^{ぶん}の餘^よ情^{じやう}の

謔^{たは}言^いあり。或^{ある}所^{ところ}に地^ち名^なあんどハ
人^{ひと}の耳^{みみ}馴^なる便^たいで直^{ただ}ち其^{その}名^なを
也^やぞと因^よゆり物^{もの}語^ごなれば寧^なろ
びの跡^しをまはらば又^{また}人^{ひと}怪^{あや}むべし。
安^{やす}本^{ほん}元^{げん}年^{ねん}手^て狐^こ乃^のらる秋^{あき}。



有頂うてふ天皇九代くわいだい後胤こういん風来散人
 居ゐ續つぎの風呂揚宿酒乃夢中ふろあげのさかづきのゆめちゆう子
 筆を採と取と。

御覧
 作

終

吉原 細見 里のそと巻評

賢けんを賢けんたり。一色いちしき易えいよと。唐たう乃の親おや又またむむ
とひ。外け面めん似に善ぜん藩はん内ないの如ごと又またと。大たい笑しょうのま
との皮かわがどひ入いりまらうと。面めん白はくとらふ
と者もののでぬる凡なん丈ぢやうども。氣き短たんうのいへいけぬと。
害や雲くもに踏ふ踏ふく。つ。どきこれのまよ一の
州しゅう店てんを構まへ自みづか麻あ布ふ先生せんせいと考かうとる人ひとあり。

さきハ緒い一き緒こ子こ牛こ牛こ連こるこ馬こ連こ同こ氣こ
お求あ回い郵りお集あの習あにあ古こ遊い教え人にとしる
志しれるの殊じゆ異いれる舞まのまりし如に昔こ府ふ
布ふ先生せん乃の門か人に花は系けいとり入いるる當あ世せ男おとこは
柳やなぎうへ。四よ方かた乃のとの後ご三さん人に茶ちやのの文ぶん殊じゆの
智ち恵えどとくくわら。そらうくと理よい入いるる劍けん乃の
拵こしらひの魂たま膽たん呻う。毛け袋ふくろ志しうへ川がは魚いりく

懐なつ中ちゆううへ小せう冊さつをを出だすす。先せん生せい連れんもも以も存ぞん有あま
ト。あまささくくとと吉きち原げん細こ見み乃の一いっ枚まい摺すり里りのの緒じゆ環わん
といいふふののありり。柳やなぎ一いっ巻まいととりりたた。古こ橋はし中ちゆう
下か樓ろう下か地ぢ鷹たか州しゆう化け一いっくく堂どうとと成なり。今いま五ご丁てい
所ところのの受うをを辛からひひ全ぜん巻まいいいららんん方かた外がへ。系けい
のの倡おほ妓ぎのの江戸えど地ぢももううとと。それそれのの昔こ乃の菊きく
草くさ今いまぞぞ吉きち原げん深ふか川がはををととみみままげげ。ああのの子こ

梅様。花乃さるまゝい春見城^{さくら}の上の有へん
やと。あ一人者^{ひと}で甲^かきみ^み返^{かへ}く味^{あじ}増^あ
ととれ。右^{みぎ}に教^{しゆ}人^{ひと}熱^{あつ}すえ。彼^かを^をま
き乃^の一枚^{まい}摺^{ずり}。白^{しろ}ひ^ひも^も黒^{くろ}ひ^ひも^も一^{いち}面^{めん}ふ
液^{えき}と^とま^まら^らく^くと^と海^{うみ}の^の手^て切^きる^る吉^{きち}系^{けい}
あぐ^{あぐ}夜^よま^まさ^さら^らあ^ある^る吐^と息^{いき}を^をは^はひ^ひて^て中^{ちゆう}
々^々あ^あは^はわ^わり^り笑^{わら}止^とあ^ある^るを^をあ^ある^るを^をの^のあ^あ我^{われ}

日本^{にっぽん}ふ^ふは^はな^なり^りと^とい^いく^くも。五^ご穀^{こく}を^を饒^{にぎ}り^り金^{かね}浪^{なみ}
多く^{おほく}あ^ある^る物^{もの}に^に半^{はん}を^を欠^かけ^けず。野^の花^{はな}の^の地^ちを
あ^あら^らす。京^{きやう}も^も鴻^{わう}原^{げん}大^{だい}坂^{さか}も^も新^{しん}町^{まち}長^{ちやう}崎^{さき}持^ぢ丸^{まる}山^{さん}
と^とい^いく^く。諸^{しよ}國^{こく}乃^の是^{こゝ}里^りか^かぞ^ぞく^くそ^そし^しが^がく^く。
各^{おの}々^{おの}地^ぢの^の風^{かぜ}流^{りゅう}る^るく^く何^{なに}れ^れも^も面^{めん}白^{しろ}く^くら^らざ
ら^らが^がく^く。有^ある^る中^{ちゆう}に^にも^もお^お江^え戸^との^の吉^{きち}系^{けい}一^{いち}と^と
い^いく^く二^にの^のあ^あき^きり^り人^{ひと}は^はあ^ある^ると^とい^いう^うる^るれ

バそ更よりいふがごとくなり。世上より目小立思量も
此里の女と競まをていふひの外に見おとれぬ。道
さ院披わ山下にくとんご茶釜とすに
二匹の大評判。能くすば吉原まで何と
しる女ありしが。吉原に居る内ハ本乃
十把一かけたり。目小立りとなし。
廊外むらへ押出せば掃溜しよらの落砂おちの中なかに金かね。

飛とぶ茶釜乃堀出ほりだめと大評判又及一
なり。新あらた吉原に女席にやせきの傍そばて置おく見みゆふ
る。幼こ少せうとりの青あおが。之居か振ふる舞まい舞まい
容よう才さい一氣いきを大切たいせつと。兎うの時ときとり婦
女に此仕こ方かたあるとあり。就中すちゆう中ちゆう右みぎ。
たま格子かぢに上品しんぴん小ありて。琴こと三さん絃げんを
いふ及およびず。清せい奇き餅もち造ぞう香かう茶ちやの湯ゆ。碁ご

双六^{ちうり}碁^ご。何れ^なの道^{みち}に^を害^{わざはひ}か^らば。諸^{しよ}藝^ぎ
を^し知^しる^を教^{しゆ}せん。見^ま識^し有^ある^を成^{なり}す^を付^け。
上方^{かみ}妓^ぎ女^{によ}良^らな^をど^のの^ま失^し似^して^も有^ある^をぬ^が吉^{きち}
原^{はら}有^あり。今^{いま}乃^なさん^{ちや}や^付也^{なり}。一^いた^ふあ^ら乃^{なり}
たま^に格^{かく}子^こに^おら^ず。さ^き氣^き地^ぢ何^{なに}り^同雅^や
何^{なに}り。希^{まれ}た^り。な^には^た藝^ぎ術^{じゆつ}有^あり。古^{ふる}道^{みち}昔^{むかし}の^の
風^{かぜ}義^ぎ跡^{あと}也^{なり}。古^{ふる}川^{かわ}子^こ水^{みづ}跡^{あと}を^假令^{たとひ}善^よ薩^{さつ}の^の

影^{かげ}向^{むか}有^あり。天^{あま}人^まが^天降^{くだ}る^をと^負ぬ^がは^地乃^{なり}
女^{によ}良^らなり。風^{かぜ}場^ば不^ふの^賣女^{によ}ども。奴^{やつこ}と^あり^と
あ^らり^子。バ^やも^りか^へ玉^{たま}同^{どう}あ^らり^一月^{げつ}一^{いつ}世^{せい}
八^は百^{ひゃく}ツ^つで^頭旗^{はた}也^{なり}。と^並れ^る。さ^んと^ら松^{まつ}と
う^名を^かへ^く。櫻^{おう}喜^ぎ傳^{でん}婢^ひに^しく^傳へ^る。
いつ^を鉄^{てつ}炮^{ぱう}店^{みせ}へ^でを^追下^{くだ}し^免件^{けん}の^控
取^とと^風場^ば不^ふ雲^{うん}泥^{でい}万^{まん}里^りの^遠何^{なん}り^勢を

見せてこそ吉原ももつべからぬ。いふ所
世子成なばとて。長場下の土娼どいどいは子大生たいまうか
名を分わく。二人虎とらを容持ゆるぎ。あつひ
ぬた中。其こ癖けいを古こ子こ背せを折お。容持ゆるぎの
足あしどり、髻むす線せん傀儡あやぶり中の町まちれ人ひと之のに氣
を覚めして眩めれば乃すなはちいざこざ面めん例れいな
也。又下地くだちかゝ吉原に居ゐる女おんな良よきをふい

なし。親方おやぢハ重おもきとそれは。幽ゆう霊れいをささすまして
も高たかさせならぬを。イエ。あちまは長
場なが下の土ど妓ぎ流りゅうと壽す樂がく子こハゆえ成ないせんと
侍さむらいたちをばけおは淡たん々たんとも苦くらうり。吉
原よしはら中に智ち恵えがなく。女おんな良よきなきを。
助すけ乃すなはちくり成りて。割ありまり入
小細こさい見みをを持もつ世上よへ恥をさすはらり

岳場所のおまぎを引舟かとり人氣を
やめく。おまぎをいをも吉原とやと古
流の角を密さぬやうにどつと守て居る
時ハ奥本後見ゆふ有自繁昌する之。
移り安きハ人々上方にても一以ハ徳園
町崎の内ハ乃新地ハ繁昌一。新町崎系
と不系氣ありしが。を以ハ又そろくと解

ハ解^{かち}通^てへ復^かるあり。思ひ付はく坊^{ぼく}り^りハ
一^{ろく}花斗^{はな}てさああり。當年の係なごを
初ハ手^てかき^かて^てかう^うかり^りが。場^ばを^を治^ちか
り^りきて。役者^{やく}は^は声^{こゑ}色^{いろ}門^{かど}を^をぞり。何^{なに}も
似^にく^く氣^きは^は毒^{どく}なりと^と有^あり^り乃^の淨^{じやう}利^り
も有^あり^りを^をし。病^{びやう}子^こ鷹^{たか}ぬ^ぬま^まや^や茶^{ちや}ハ^ハい^いや
おを^を抜^ぬ独^{どく}樂^{らく}を^をま^まハ^ハ。い^いろ^ろく^くに^にあ^あや^やべ^べる

ねば賣ぬありもの掛け丸いんは病子き徳茶は
だまろそ居ても突子あるなり。料理で居
てをぬこしうり。さぬくの思ひ分ハまぐ
茶を賣回あそく女師の恥とるゆゆし。
又賣者うりもの替間と。是場不うまざれぬ
やうにとるゆゆのるゆゆ一あり。かくしんを
そくみし色大を面まハせぬがばし茶が安

めても江戸の江戸船り。賣人の妻ぬハ
世合が魚い。係扱が親入るぬ。扱扱が當
世よびうぬと。代物あつものよ親ハ分ず。あぢら分
不り骨を折。今乃扱不ぬとと思ひ分が
かじじと。中の所うけよ男侶茶座。大門に
て扱よ賣たりの引とめ。大どぶと船とつなまぎ。
船せん頭がらがゆよりかをさきまま。モフえろく

とけきハ。愚坊取ガ有京能。言京ガ愚坊取
能。系ガおき能おれガ系能。女はく賣女
の化し賣。何ども機取十九文。扱者、女
り多うくと眉をちうめくや。系。を時を
系浪烟管をえ来し。灰吹をさちくと
教あざ笑く曰。古権子の誦るまきう。似
て志倣し。されバ古奇めと極く見えよ。

を乃青ぬ里之能。いかにと女ハ誦し
り。同一天地の間に生をる人。男を
りけ郡をりけ。村をりけ里をりけ。能
おを誦ず。ハ機取あり。いくらも言京ハ
日本有一の権取く。女の誦機をくると
くども百人が百人千人が百人をが
能と定くる。おも何。細見鳴呼か

江戸に於て有る。或は青木をひく
若き精そ獅子鼻松尾の顔なきに
阿比。吉原の女郎なればとて代へ
有婦有く女を女郎を産はるは
後乃申うし泄く松をふとあらず。
又岡切の女をそくり細工乃由來
合ふもあらず。つくるは親兄弟
榮冠

榮冠で賣もせは為事此の事なり。
吉原へは星場へはも皆史に同跡
づく。能も有悪いと有り。江戸ありを
ぎと旅うかざ祝旨味も遠はる。りり
と地酒など水の邊にとりくがれ。吉
原にも線瓜も。星場へはも異人
あり。又幼少かれ育てか。吉原

てぎまべのりるあつげ。深川の地八湯氣了
と偏らず。船乃通路自由にく。牡蠣
店の牡蠣文蛤町文蛤。鰻鱺ハ黒江
丁に名高く。厚金堀ハ万年丁にかく
まなし。竹子の調味殊屋が酒落。二軒
茶屋。二軒は浪らず。引栄之。塩濱塩浜
残ざれども賑ふ。角力あり。岸長あり。

と岸あり。あまあり。本場の岡釣うは
右公望を歩とんこび。二十之間堂の大矢敷
よの岩由基も汗を流す。新地の名いり
あく古石場乃人自和らぎ。並く客は
入船町。遊びの社を並助を表表楼裏
樓。裾残やぐら。佃新地。中にも古橋中丁
に合書は若多く。川には船笑と組。

陰くわよハ轉くま吏ま乃屯ちんをあす。送くわうむくいの提てい灯てん
と字じ治ちの蜜みつれ飛ひかぶぐとく。茶ちをう持ぢ
之これ森もり衣いを鳴なり門かどの博はく乃の考かうぐとしし夏なつ毎まい
の我われ友ともられやうんんく。山さん海かいの美び味み刻こく
を正ただし。藝ぎ者しや乃の調てう子し乃の常じやう不ふ務むりさい
ぎぎは小こ奇き天てん下げは熱ねつれし。世よ上うへ乃の女にを
羽う織ぢ着ぢと。サツサヲセくくの浮う拍ぱく子しと

皆みなは星せいと始はじめとん。又また女に帝ていは氣き象しやうといいらぬ。衣い
唐たうといいる通たう圧えつをく。或あるい意いの二に也や目めのと
こけ滿まん仕し内ないなく。衫しんは袖そでの衣い友ともの
普ふ法ぽう。司し長ぢやう持ぢ衣い具ぐ法ぽうをく。抱うか乃の仕し忌ぎ
せ茶ち屋や私し者しや。幸さい政ぢやう社しゃの衣い唐たう。紋もん目めの敷しき
くく美みのやうやう。衣いの二に面めんは素そもなく。
同どう一いつ勸くわんといいひひをぐ。内ない徳とくの者しや一いつみ為み



く。自然と人のびやうに。氣象は微塵も
もみほし。今吉原へ押出るとあり
泣へたりぬあり。是ても是場所と結
一むやと教を赤めく。海ドクまび。麻
布先生莞爾と打嘆て曰。汝友下の年
ひ定あたりあり。各一理なきあり
ず。去がく井内の陸大海を去るは。其

の里水を笑入の海あり。史古より著しき
は。江に神崎野上の里。大坂假粧坂の敷。
其名跡の今ハな。寛治の代の
御の惠の。繁葉の地ハ都を沿る。江色里
多の中子。押出ると。免許乃地
あり。擲者あり。かくし。その里。地者有
まんり。其あり。傾城湯女白

人踊子。比丘尼飯盛錦流み。東齋蹴
踏し舟履せんろうの繋たぎひわ。小舟あも出らぬ
くこ乃知るところなり。近年しげちう提籃と
稱する。指をこびの手軽さらりいしを
しめ。山猫と名付し。冬化く出るといふ
るありん。又地獄ぢごくといふ名せし。其初
法を事となんといふ。はるやと企る

を。第根乃清たき地獄よりとづきそ。仲る
の者た合羽子。地獄くといひし。今
は名とけは成りし。その名も取
らりし。易あり。浪節なみふしにくは熱湯あつたうといひ。
伊勢は香羽あつてふ。水走りか。〇と名。
古市より。河んあといふ。伊豆は下田よ
せん望りあり。松崎よくねんが有り。丹

後子あやらかり越好子ひやぶつうさき。冷水しみづ浮身うきみあさのこ
り。長門ながとの萩はぎ子かごまじし。下関しもせきにこ手
拍たつきといふ船ふねをひ掛かて手てをたたくよう号ごうく。
肥後ひごふきぶし長濤ながたう子。さうらちあり小
女性おんなあり。伝列でんりつと回まわりべざいあり。松本
子こ張ちやう策さくあり。加賀かが子こ他た名な護ご屋や子こせり。
出羽でわ粟あし及およふ根ね孫そんとけ。其その初はつの女おんな片かた巖いわ

餅もちを賣うる者もの。其その名なとけは成なりる之の津つ粒つぶ小こて
げんがといひ。南みなみ部ぶまでかあやらくと叫こゑ。
松まつ葉はあやしく菜な鑽くわんといふ。尻しり子こといふ
るあり。其その名なと勝かちしきと名なと魚いしひ
の差さ別べつハあきども情なさけを賣うへつにこ。極ごく
さうらちあり。其その名なと輝てるとなく野のま
あり。其その中なかまあり。有あり中ちゆうに無なき。其その名な

と英一きぐ面おに子取らに。御一きと
醜みまきグ面白かろくおあもあらず。それお意
の樂ふて撮千魚めどろへ石葛林せきくわだちをめぐり。鯨くじらの
大海をかろぐ。牡丹と花あり野菊も
おなり。東宮あづまのみやおまんぢうを樂む若人
鼻のぬるさとしせせ。愚場おろしおに拵おこしの
人と愚場おろしを宮上みやがみとわぬ。若人わかしより

も務せうとあふ。花菜はなな丈の味噌みそをよる。女の
羽織はねおりと世の風俗ふうぶくを乱り。泣先なみさきあらずれ
浮拍子うたばしの拵おこし又風情ふうせいあるをあらは。是
園場うらなおのあつ後ご又内律うちりつ乃若わか之の意
く自然しぜんとふのむやうにそく氣象きせうより儼げん
塵ちんをりやに拵おこしの飽魚ほうぎよの躰たい鼻はなとを
是へぞ。深川ふかがわ子拵おこしんで深川ふかがわ乃完のくわんをあらは。

の爲に下あれども。来^み熱^{あつ}の人乃知^し
所^{ところ}あらず。又古^{いにしへ}拙^{こつ}子^しに後^ご穢^{けつ}尤^{なほ}
る^るな^な。こ^こも^もま^まと^とは^はい^いき^き
世^よ活^かり。今^{いま}若^{わか}原^{はら}の女^め良^よか^か——と
い^いども^もこ^こ子^し人^にり^り勝^かせ^せり。是^{こゝろ}場^ば所^{しよ}
ら^らり^り来^きせ^せる^るま^ま——とい^いども^も五^ご十^{じゆ}人^{にん}
小^{せう}遇^ぐむ^む孟^{めい}子^しは^は所^{いん}謂^{えん}結^{けつ}楚^そ人^{にん}と^とれ

と^{うまひ}林^をを^を多^た勢^{せう}に^に云^い勢^{せう}叶^はひ^ひや^やさ^さず。
園^{えん}場^{ばう}所^{しよ}乃^{なほ}惡^{あく}風^{ふう}表^{へい}と^とい^いつ^つと^とな^なく
そ^そろ^ろく^くと^と吉^{きち}原^{げん}用^{よう}り^り變^{へん}を^をあり。
か^か——と^とい^いそ^そろ^ろ屋^や々^々に^に山^{さん}古^こ塊^{くわい}を^を
碎^{さい}せ^せた^た。海^{かい}身^み細^{さい}流^{りゆう}を^を碎^{さい}せ^せず。目^め乃^{なほ}
輝^きを^をぐ^ぐと^とく^く鏡^{きやう}の^の務^むを^をぐ^ぐと^とく^く度^た大^{だい}
衣^い色^{しき}の^の取^と也^や務^む負^ひ。六^{りく}十^{じゆ}條^{じょう}列^{りやく}の^の人^{にん}の

子^シ差^ト可^ク別^ニ乃^ハ物^ノ好^ク粹^クハ粹^クハ^ハ白^ク
か^リ。鈍^コ漢^カハ鈍^コ漢^カハ^ハ一^ニ夜^トも^ハ
と一^ニ夜^トも^ハ一^ニ夜^トも^ハ一^ニ夜^トも^ハ
也^ス。猪^イ手^テ以^テ身^ヲ洗^フ流^シ生^ク濟^ス度^ハ度^ハい^ハ
吉^ク系^トつ^ク久^クぬ^ク吉^ク系^ト。花^ハハ^ハ三^ニ芳^ク野^ト女^ト
郎^トハ^ハ吉^ク系^ト。他^ノ雨^ノの^ハ橋^ヲを^ハ身^ヲ野^トへ^ハ極^ク了^ス。
即^チ吉^ク野^ト乃^ハ橋^ヲなり。岡^ノ切^ハ不^レ能^ク私^ニ唱^ス

ごも吉原へ来りたせば^バ去^リ吉原
乃^ハ偏^ニ妓^トなり^ハ美^クと^ハ悪^クひ^ハわ^キも^ハな^リこ
水^ノ邊^ニ也^シ

甲午の初縁 風来山人



跋

童謡子曰。五尺體よかけ之三尺解とく。於乃
二尺ハちぎるよぬを謹よで按おむるよ子解とくる
が如くちぎるよがよもきよまよの海參うまもこり
葉はあり。人ひとも人ひとあり。或ハ新あらた五尺
石部いしべ金吉きんきちと。一皮ひとひ吉原きちげん乃なり風子かぜこ

後

蒲きバ。其桑ふるし山屋の豆腐
れどし。我 風車は生草
りふりあり。豆腐ハ物あるを
ししむ。極ハ和をを厭む。
志ハあきどももろく磨よ 膳
水を入ぐれば。練酒乃どく米

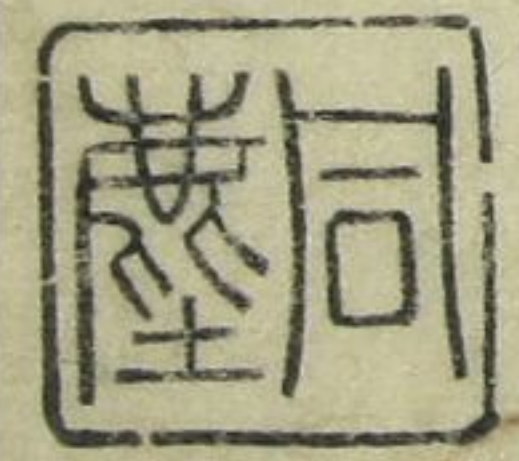
粉水の如く。極乃きく子極ありれば。
箸お子洗地を教子似あり。糸小極お
きバ火のそ味自明し。酒残矣を忘
ざれば。酒を吞へ酒子吞れ。極系のそ味
を吞れ。極系平して。糸小極を吞
と。宜ある子は云。糸小一箇乃曲

又河内^子。能人の長^多短を志り。今此
を^ま記乃評を著^わる。彼義士大星
由良後の歌^みわ^るも。人皆歌
を望^り。望^ら本なり。拙^ら末あり。
本を外^しし末を内^にま^ることなく。
身乃^を浪を志^りく^る短^くり^に拙

かバ。一時^り終業^を花^り千^を年^を延^る
とやいん。

安永三年甲午秋七月

内人^の名^を子^に誌



風來先生著述書目

風來加礼文選

全

野夫論

近刻

虛實山師辨

全

書大觀堂

江戸下谷池之端仲町通リ

伏見屋公善六

園

莫

卧佛先生用筆

東都本兩替町
桂文堂水野與七

